
花嫁の形代女王

堅川杼緯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花嫁の形代女王

【Zコード】

Z4971F

【作者名】

堅川杼緯

【あらすじ】

レーヌ・ド・ウラサンドルは、女性からは「形代の女王」と呼ばれ、男性からは「死神女王」と呼ばれている。そして今日もまた、彼女を必要としている娘がレーヌの元へとやってきた。

この地では、女兒が産まれると、母親は来るべき日に備えてヴェールを編み始める。

家紋を編みこみ、娘の名前を意味する模様を編みこみながら、母親は娘の幸せを願う。

そうやって編まれていった花嫁のヴェールは、やがて娘が嫁ぐ日に、その頭上を飾るのだ。

がさがさと草木に騒々しい音をたてさせていた存在が、大きな泉のすぐそばにある崖の上に姿を現した。

若い娘だ。

道なき道を進んできたことを証明するよつて、彼女は髪やドレスに幾つもの枝葉をつけていた。

「形代の女王様……」

肩で息をし、青ざめた顔にふさわしい疲れきつた表情を浮かべていた彼女は、目的の存在を目にするとや、安心したように相好を崩した。

娘はふらふらになりながらも最後まで踏破した。そして辿り着いた瞬間、安堵のあまりその場にへたり込む。

そうまでして娘が訪れた先には、一体の石像があつた。

等身大と思われる、若い娘の像だ。

けれど『女王』という呼び名に反して、その像はドレスを纏つておらず、それどころか男装していた。もつとも、よく似合つてはいたが。

その『女王』は女性の割には長身で、服装の関係もあって、手足も健康的にすらつとのびていることが見て取れる。

惜しむべき唯一は、顔だつた。わずかに目を伏せている以外は限りなく無表情に近い顔は、造作が整っている分、冷たい印象が強い。だから像全体のイメージも冷たく感じるかといえば、実はそうでもない。

理由は『女王』の両腕にある。

気負うことなく、一本の足で立つて『女王』は、両腕をゆつたりと広げているのだ。

開かれた『女王』の胸元に飛び込めば、やさしく抱きしめてくれるだろうと、疑いなく信じられるその一本の腕。

そんな『女王』の頭に、ようやく呼吸を整えることができた娘は、大事に抱えていた花嫁のヴェールを恭しく掛けた。

娘自身は、顔も含めて体中傷だらけで、身に纏っているドレスも薄汚れている上にあちこち破れている。にもかかわらず、そのヴェールだけは綺麗な白さとすばらしい模様をわずかなりとも欠かさずなく保っていた。娘にとって、そのヴェールがどれほど大切なものなのか。それだけで十分理解できる。

娘は跪くと、『女王』を見上げた。そうすると不思議なことに『女王』の伏せた瞳と視線が絡み合つた。

娘は祈りの形に手を組む。彼女にとって縋ることのできる存在は、もう『女王』しかいなかつた。

「形代の女王様。私は、どうしてもあの男に嫁ぎたくないのです。それに、私が嫁いでも嫁がなくてても、あの男は私の家族にひどい仕打ちをするでしょう。私には女王様にお縋りするしか方法がないのです。だからお願いです、女王様。私の命を代償に、花嫁の形代を

私の家族の未来を救つてください！」

もう一度、お願いしますと頭を下げた彼女は、手の形と心の中で祈りを続けながらゆつくりと立ち上がり、崖つぶちに歩み寄る。そうして躊躇することなく崖下へと身を投じた。

崖の下にある泉が大きな水音を立て、やがて静寂が戻つた。

形代の女王の像に異変が起きた。

最初は錯覚と思えるほどの微細なブレを見せていた像は、やがてはっきりと輪郭を滲ませた。掛けられたヴェールがふわりとなびき、そして、像が一体に分かれた。

否。分かれたのではない。像の中から抜け出して来たかのような現れ方をした女性は生身だった。そして『女王』と瓜二つだった。この女性がモデルだと言えば、疑うものは皆無だろう。事実、『女王』の像は、この女性を模したものだった。

像に掛けられていたヴェールをその頭上に受け継いだ女性は、ヴェールの下で、伏せていた目をゆっくりと開いていった。

おもむろに身を翻した女性は、娘が身を投げた場所へと足を運ぶ。崖つぶちに立つた女性は無表情に崖下を見下ろし、露になつた灰色の瞳に泉を映した。

「あなたの願いは、このレーヌ・ドゥラサンドルが引き受けた」発する声すら平坦で、一見何の感慨も覚えていないようにみえる。けれども、そうではないといつようこ、レーヌの肩にとまつていた小鳥が、彼女を慰めるように可愛らしく歌つた。

テリトワール・ドゥ・ラ・フルール。『花の領域』と呼ばれるこの地は、名前のとおりに花の勢力が強く、いたるところが花に埋め尽くされている。

そのため、生花そのものもさることながら、多種多様な加工品特に香水や化粧品といった女性向けの商品は人気が高く、近隣の領地で飛ぶように売れている。中には数年先まで予約で埋まつてしまつて、一般の流通に乗せられない品さえあるくらいだった。

そんなテリトワール・ドゥ・ラ・フルールでは、本日盛大な結婚式が執り行われていた。なにしろ領主バティスト・ドゥ・サドと、この領地一番の資産家であるルブラン家の長女 アルベルティ

ヌとの結婚だ。領民総出で盛大にやうやくやるを得ない。

もつとも、盛大だからといって、明るく楽しく祝福に溢れたものかと問われれば、ほとんどの者が違うと答えるだろう。この結婚式はそういう類のものだった。

ありがちな政略結婚ならば、双方にそれなりの利益があるものだが、今回の場合は領主自身にしかない。結婚という名の形式のものにおこなわれる一種の略奪行為だということを、口にはしなくとも誰もが知っていた。

領主バティスト・ドゥ・サドは、今年五十路を迎えた、でっぷりとした体形の男だ。しかも離婚歴が十一回あり、アルベルティーヌとの結婚が十三回目だつたりする。

アルベルティーヌが領主に目をつけられたのは、早春の祭りで歌声を披露したときだ。

十六歳になり、ようやく^{おおやけ}公のステージに立つてソロで歌うことが許される立場になれたことを、アルベルティーヌが心から喜べたのは、歌い終わつてステージから降りたところまでだった。

家名と同じ『ルブラン』をブランド名に掲げて売り出した化粧品シリーズが爆発的な人気を得、ルブラン家は領主を務めるドゥ・サド家を凌ぐほどの資産を得た。それを快く思つていなかつたバティストにとつて、アルベルティーヌはルブラン家の資産を穩便に取り込むための絶好の窓口足りえたのだ。

もしルブラン家がこの結婚を受け入れていなければ、バティストは罪を捏造していただろう。そうして一家は投獄され、家財一切は没収後バティストの個人資産にされていたに違いない。領主バティストとはそういう男だ。

そんな男に嫁ぐことになつた花嫁に、形なりとも祝福を贈らなくてはならない領民の心境は複雑だつた。

とはいへ、それも当事者である花嫁のものと比べれば、ずいぶんと軽かつただろう。

お披露目そのための花車に座す花嫁は、終始俯いたままで動こうと

はしない。

本来であれば、実際の表情はヴェールで見えなくとも、幸せいっぱいな笑みを浮かべているであろうと安易に想像できるほどに、嬉しそうに手を振りながら、降りかけられる祝福の花をその身に受けているものである。

事情を知らぬ幼子たちも、その異様な雰囲気を感じ取つてか、幾分戸惑いながら、それでも母親に促されるままに、花嫁に向かつて花をかけていた。

そんな花嫁を乗せた花車は、教会へは向かわずにドウ・サド家へと直行した。バティストにとつて、用がなくなればこれまでどおりに離婚して放り出すだけの花嫁と、形だけの誓いを交わすなど、無意味でしかなかつたからだ。

花車のパレードをおこなつことで、領民への通知は果たした。それ以上の手間をバティストは望まなかつた。

ドウ・サド家へと到着したアルベルティーヌは、ウエディングドレスを身に纏い、ヴェールすら頭に被つたままの状態で、初夜を迎えるための寝室へと通された。

彼女を案内した召使が退出すると、アルベルティーヌは小さなため息をひとつこぼし、窓辺に向かつてゆっくりと歩き始めた。

高台に建てられたドウ・サド家の屋敷。

バルコニーに出ればもつと見晴らしがいいだらうと、窓に手をかけたところで、部屋の扉が外から開かれた。

「戻つたぞ、アルベルティーヌ。私がお前の夫のバティストだ。さあ、歌え、アルベルティーヌ！ お前の歌声で夫である私の疲れを癒すのだ！」

部屋に入つてくるなり、バティストは大声でそう命令した。

自身も花婿と呼ばれるこの結婚の当事者であるにもかかわらず、パレードを放棄して、己の仕事に赴いたバティスト。そして初顔合わせとなつた今このとき、花嫁に対して詫びも労いもまったくなく、

ただ己の要求だけを口にすると、独りソファーに腰掛けた。名乗つただけましだと、言つものもいるかも知れない。けれど花嫁に対し、これはあまりにも非情な仕打ちだろう。

無言でたたずむアルベルティーヌに、バティストはぞうに声高に命じた。

「どうした、アルベルティーヌ。夫である私の命令が聞けぬのか？逆らえればお前だけでなく、お前の家族も痛い目を見るのだぞ！」アルベルティーヌはおもむろに窓を開け放つと、その行動をいぶかるバティストへと向き直つた。

ようやく己の方を向いたアルベルティーヌに氣をよくしたバティストは、ワインをして口を潤す。

「さあ、歌うのだ、アルベルティーヌ！」

ワイングラスを高々と掲げ、バティストが命ずる。だが。

「歌えぬな」

抑揚のない静かな声が、命令を拒否する言葉を返した。

「……なんだ？ もう一度言つてみなさい」

聞き間違いと思ったのか。はたまた身の程を知らぬ小娘を諭すための方便なのか。バティストは一瞬だけ片眉を持ち上げると、もう一度と促した。

「歌えぬ、と言つたのだ」

もちろん、返された言葉は同じだつた。

バティストは勢いよく立ち上がると、持つていたワイングラスをアルベルティーヌに向かつて投げつけた。当然悲鳴を上げるものと思つていたバティストの予想に反し、アルベルティーヌは危なげなく避け、ワイングラスはバルコニーの手すりにあたつて砕け散つた。

「きさまッ！」

激怒のあまり、顔を紅潮させて拳を震わせるバティストを前にして、やがてアルベルティーヌはくつくつとのどを鳴らし始めた。

「まだ気づかないのか。おろかな男だな」

「どうしたことだ！」

「アルベルティーヌはお前の花嫁なのだろう？　その花嫁が本物かどうかすらわからないのだから、救いようがない」
もつとも、お前のようなものを救う義理は、私には端^{はな}からないけれど。

そう言つて、女が一步、バティストに近づく。

いまだに左手に持たれていたブーケから、女は白い花を一本抜き取つた。

そして、また一步。女はゆっくりとバティストに歩み寄る。

「きさま、何者だ！」

バティストの誰何など何処吹く風といった感じで、女は右手に持つた白い花を口元まで持ち上げ、ヴェール越しに恭しく口付けた。そのしぐさが記憶を揺さぶつたのか。バティストが驚愕の表情を浮かべて女を見返した。

「お前は、まさか……、死神女王！？」

自身の叫び声で我に返つたバティストは、即座に身を翻して逃げようとした。

けれどそれより早く女が動いた。

バティストの眉間に、女が手にしていた白い花の茎が突き刺さる。そのまま仰向けに倒れたバティストの姿を、伏せた灰色の瞳で捉えた女は、抑揚に欠けた声で呪いともとれる言葉をつむいだ。

「もうじき、地獄からお前の迎えがやつてくる。お前が娘たちに与えた数々の苦しみ。その何十倍もの苦痛を、そこで存分に味わうがいい」

すでにバティストの人としての生は終えている。

けれど、バティストの魂を見ることができる女の瞳には、楔の役目を果たす白い花を突き刺され、逃れることができずにもがく様子が鮮明に映されていた。

そのうち、バティストは白い花を抜こうと悪あがきまで始めた。女は薄く笑つた。

「お前にはその花は抜けぬ。その花は楔。その花は地獄の使者への

目印。見るがいい。お前の命を吸つて、色が変わつていつてい
るだろ？ その花が真紅に染まりきつたとき、地獄の門が開く」

ほり、こんな風に。

女の言葉に導かれたように、何も空間に突如一本の黒い線が
縦に走つた。

やがて黒い線は徐々に太くなり、姿の見えない門が開かれたこと
を知る。

門の向こうに広がるのは闇の世界。そこに大柄な一体の鬼が立つ
ていた。

一体の鬼と女は、軽く会釈しあう。その後は、鬼がバティストの
魂を捕まえて、早々に地獄へと戻つていつた。

音もなく、姿のない地獄の門が閉じる。すると女が被^{かす}いていたヴ
ェールが、突然青白い炎に包まれて燃え始めた。

そんな異様な現象をその身で体験していながら、けれどまったく
熱さを感じる様子も驚く様子もなく、女はゆつたりとした足取りで
バルコニーへと出た。

やがて燃え尽きたヴェールは灰となり、吹く風に乗つて空へと舞
い上がつた。

女には炎の影響はまったくなかつた。まさにヴェールのみが燃え
たようだ。

「このヴェールはアルベルティーヌのもの。いつまでも私の頭上を
飾らせたり、ましてやこの家に欠片なりとも渡すわけにはいかない
からね」

すでに風の一部となりかけている灰になつたヴェールを見つめな
がら、女がつぶやいた。

そんな女の肩に、一羽の小鳥がとまる。

「レーヌ、お疲れ様」

灰色の瞳に、さらりとまっすぐに流れる同色の髪。すらりと伸び
た手足を持つ、長身の女性。バティストに死神女王と呼ばれたその

女の名は、レーヌ・ドゥラサンドル。アルベルティーヌが形代の女王と呼んだ、あの女王像に瓜二つの外見を持つ女性だ。

そのレーヌに効いの言葉をかけたのは、彼女の肩にとまっている

小鳥だつた。

小鳥の名を、プティ・プリュムといつ。

プティとレーヌの付き合いは長い。だからレーヌが今何を見て何を思つているのかが、プティにはなんとなくわかる。

「気に病んじやだめだよ。レーヌはただの神の使い 使者でしかないんだから！」

レーヌは微苦笑した。

「そうだな。だが、あの男が言つたように私が死神だということも、また事実なんだ」

「そんなことないつてば！」

プティの反論に、レーヌは首を小さく左右に振つた。

「プティ、私にだつてわかつてはいるんだ。私は神の使いでしかないといつことは。だが、こうして役目を務めていくつちこ、ふと考えてしまつようになつたんだ」

そういつて、レーヌは自身の掌を見つめた。

「今回のように、実際に男の息の根を止めて地獄へと送り出すのは、私のこの手だ。そして、娘たちが己の命と引き換えにした願いを告げるのは形代の女王像 つまり、神ではなく私に願つているわけだ」

「だつたら……」

レーヌは軽く拳を握つて、瞑目する。

「私こそが、男と娘、そのどちらにとつても死神だつたのだといえるのではないだろうか、と」

この調子では、今は何を言つても無駄だろうと判断したプティは、ため息をひとつ落とすと、レーヌの肩から飛び立つた。

その直後、新たな存在が、レーヌの背後に現れた。

驚いて、反射的に振り返つたレーヌの視線の先には、全身黒ずく

めの男が一人立っていた。

男が言つには、地獄の門が開かれていたので、興味が沸いて訪ねてみたということだった。そうしてレーヌの発言を耳にするに至つたのだといつ。

男はレーヌに向かつて微笑した。

「君は死神などではないよ」

そして、こいつ表現も変だけど、と言つて自分の胸に手を当てた。

「私が『本物の死神』なんだ。その私が断言するのだから、お嬢さんは死神ではない。だから安心しなさい」

レーヌは自称死神をほうけたように見つめた。

「おや、言葉だけでは信じられない？」

だつたらと、男は何の気負いもなく左腕を持ち上げた。肩の高さにある掌の上に、徐々に闇が集まり渦を巻き始める。やがて闇が深く濃く凝つたところで、男は何かを掴むような仕草をした。すると凝つた闇は、息を呑むレーヌの目の前で、一振りの大鎌へと姿を変えた。

「これで私が真実死神なのだとということをわかつてもらえただろつ？」

男は口元だけでニイと笑つた。

その笑みに、レーヌは肌が粟立つのを感じた。そして背を伝つた冷や汗によつて思考力を取り戻したレーヌは、慌てて膝をついた。

「失礼しました。わたくしは女神『フォンテーヌ』の使いを仰せつかつております、レーヌ・ドウラサンドルと申します。死神様への此度の振る舞い、叶いますればご寛恕願いたく存じます」

跪拝するレーヌに、死神は苦笑してから空いている右手を差し出した。

「ほら、そんなことをしなくとも構わないから、立ちなさい。私は怒つてもいないし、不快にもなつていないのでから、気にする必要はない」

普段どおりにしていればいいと言われ、レーヌは素直に差し出された手を借りて立ち上がった。それがかえって死神に好印象を与えたようだ。男は穏やかな微笑を浮かべた。

それから口元に手をやる。

「『灰の女王』か。^{レーヌ・ドウ・ラ・サンドル}君のことは、私たちの間では『復活の女王』と呼ばれていてね。一度会ってみたいと思つていたんだ」何を噂されているのだろう。

そう思つた直後、レーヌは青ざめた。

「どうした？」

レーヌはその問いかにどう答えていいかわからず、苦し紛れに闇の大鎌を一警した。

死神と出会つたものは皆、大鎌によつてその命を狩られてしまう。それが通説だ。だつたら、レーヌもこの場で狩られてしまうのだろうか。だが、自分が殺されるかどうかなど、聞けるわけがない。否定されればいいが、肯定されようものなら、どう対処すればいいのだろう。

レーヌのそんな葛藤を感じ取つたらしく、死神はくすりと笑つた。「使い人である君には、神から命じられた務めがあるだろう。それを完遂するまでは、私が勝手に狩るわけにはいかないから、とりあえずは安心したまえ」

それから、と言つて、死神はレーヌに對して紳士の作法に則つた礼をした。

「私の名は、ノワール・エテルネル。次の機会を得ることがあれば、ぜひ我が名をその唇に」

ノワールはレーヌの手をとつて甲に口付けると、唐突に姿を消した。

レーヌは疲れたように大きく息を吐き出しながら肩を落とした。最後まで突飛な言動で彼女を振り回し、拳句の果てはこんな退場の仕方。

再度ため息をこぼしたところで、レーヌはバルコニーの端へと移

動した。それからおもむろにドレスの裾をたくし上げると、まとめてから片手で持ち、もう片方の手で手摺を掴む。その手を軸にして、レースはバルコニーから飛び降りた。

難なく着地したレースは、ドレスの裾を元に戻して身なりを整えると、あたりを見渡してパーティの姿を探した。

瞬間、空気が凍つた。

レースの全身が先ほどとは比べものにならないくらいにカタカタと震え、全ての毛穴が開いて汗が吹き出す。

後方で何が起きたのか。見えなくともレースにはわかつた。

ノワールがあの闇の大鎌を振るつたのだ。

だが、レースが振り返らないのは　振り返れないのは、それが理由ではない。

動けないのだ。

今はまだ殺さないと言われた。だからさしあたつて命の危険はなればず。

けれど、レースは動けなかつた。

本能がしきりに警鐘を鳴らし、彼女の体に鎖を幾重も巻きつけたかのように固定して、動きを封じているのだ。

さすがに神の名を「冠」しているだけのことはある、とレースは思う。死の女王、死神女王などといって人間に恐れられているとはいえ、彼女はもちろん神ではない。あの呼び名も、『レース』という彼女の名が『女王』という意味を持つが故の皮肉であつて、実際は女王ですらないのだ。

だから本物の神を前にすれば、違いは一目瞭然。力の差はこのようには歴然としている。

時間にしてほんの一瞬。あの大鎌を振るにはそれだけでじゅうぶん。

神である彼は、たつたそれだけ力を放つだけで、狩りの対象外であるレースさえも恐怖という無形の存在で拘束することができるのだ。

（格の違いとはこいつこいつことか）

ようやく空間が平常の状態に戻り、それにあわせて肩の力を抜いたレーヌは、何の前触れもなく背後から現れた手が両肩に置かれ、驚きのあまり飛び上がった。

「……っ！」

「動かないで」

反射的に振り返りかけたレーヌの肩を、その手が押さえつける。声と手の持ち主は、死神のノワール・エテルネルだった。

先ほどのような恐怖は、もう彼からは感じられない。けれどなぜか逆らうことはできず、またその必要性もなかつたことから、レーヌは抵抗の意思がないことを示すために、強張った体からゆっくりと力を抜いていった。

「そう。いい子だね」

楽しそうなノワールの声。実際にすくすくと笑う声も小さく聞こえてくる。

「振り向かなかつたご褒美をあげよつと思つてね。戻ってきたんだよ

そんな台詞を聞かされたレーヌは、どうこいつことかと胸中で首を傾げた。

それが伝わったのか、ノワールは実はね、と答えながらレーヌの肩に置いていた手を持ち上げ、一方でレーヌの両耳を靡き、もう一方は髪を搔き揚げて片耳を露にした。その耳に口唇を寄せ、直接囁きを吹き込む。

「私の大鎌は、なぜか仕事をしているところを他人に見られることを極端に嫌うんだ。それで、わずかでも田にした者がいれば、私の制止を聞かずに勝手に狩つてしまふんだよ」

ノワールいわく。神の世界にも位があり、勝手をすれば上位の者からそれなりに制裁が加えられるのだといつ。それを回避できたお礼ということだった。

「だからね、褒美をあげるよ。 といひで、君の仕事はあと何回

残っているのかな？」

「……四百一十三回です」

レーヌが神から与えられた、花嫁の形代を務めなければならぬ回数は千回。どうにか折り返しを過ぎたとはいえ、まだそれだけ残っている。

この残りの回数とは、形代を務める回数であると同時に、命を奪わなくてはならない男の数もある。

己が身をおく状況を改めて認識したレーヌは、自嘲するように、傍目にはわからない程度に口角を吊り上げた。

元は人間だったレーヌにとって、他人の命を奪うことが辛くないわけではない。けれど感情を胸裏に隠すすべを早々に学び、プレティ以外には素直になれないレーヌが見せた動きは、ただそれだけだった。

もつとも、ノワールに対しては筒抜けだつたらしい。

背後から薄く笑つたような気配が伝わつた。

ノワールがその美声で誓約を口にする。

「この先、どうしても己が手で奪えない命にあつたとき。一度だけなら、私が代わりに狩つてやろ!」

「それは……っ」

レーヌは混乱した。これは彼女の仕事。代わつてもうわけにはいかない神からの命なのだ。しかも自分に奪えない命など存在するはずがない。否、あつてはならないのだ。そう言おうとした声を封じるように、ノワールの人差し指がレーヌの口元に当てられた。

「心配は要らない。一度だけという誓約書があれば、私が狩つた命も君にカウントされるようになることなど造作もない。もちろん私の力を利用するのもしないのも君次第だ。褒美を受け取らなかつたからといって逆恨みをするほど、私は狭量ではないからね」

そう言つてノワールは、レーヌの細い首に自身の唇を触れさせた。ちくりとした痛みをレーヌに伝えてから離れていった場所には、黒色の薔薇の刺青が残された。

「これが誓約書だ。私の力が必要になったときは呼ぶがいい。いつでもどこでも参じてやろう」

そう言いおいて、ノワールは唐突に消え去った。

レーヌは大きく息を吐き出しながらその場にへたり込む。

「レーヌ、大丈夫？」

どこかに消えていた小鳥のプティ・プリュムがいつの間にか戻ってきて、レーヌの顔を心配そうに覗き込んでいた。

「どこにいつていた」

「逃げてた」

プティはあっけらかんとそう答える。鳥獣は危険には敏感なんだよ、が口癖のプティらしい。

大丈夫、と再度問うてきたプティに対し嘆息をもらしたレーヌだつたが、元来まじめな彼女は、しぶしぶながら大丈夫と返した。

大きく息を吐き出し、レーヌはおもむろに立ち上がる。

「さて、『彼女』を迎えて行くか」

「そうだね。レーヌも疲れているみたいだし、さつさと仕事を済ませて帰るわ」

形代の女王の像の後方。切り立つた崖の先には大きな泉がある。形代を願い出た女性が、身を投げる泉だ。

その泉を見下ろせる位置に、レーヌがプティを伴って立っていた。レーヌが崖の上から右手を差し出す。すると、その泉から淡く輝く小さな光の玉が浮き上がってきた。

その光の玉に向かつて、レーヌが口を開く。

「あなたの望みどおりに、あの男を地獄へと送った。これであなたのお身内に危害を加えるものはいなくなり、あなたも自由を得た。だからもう未練はないだろう。この手に乗り、行く末を我らに委ねるがいい」

光の玉は数度明滅を繰り返すと、レーヌの言葉に従い、差し出していた彼女の掌の上に乗った。

すかさずプティがその小さな嘴で光の玉をちゃんと突く。すると、光の玉は花の種へと姿を変えた。

「これからあなたを『樂園』へと連れて行く。そこで一輪の花として新たな生を送るがいい」

どのような理由があつたとしても、本来であれば、自ら命を絶つた者には樂園に居場所はない。

けれど薔のまま散らねばならなかつた娘たちを不憫に思つた女神によつて、花へと生まれ変わることで樂園に住まつことを許されたのだ。

『ありがとう』

花の種となつた『彼女』の魂がかすかに囁き、その一言を最後に『彼女』の人としての意識は完全に消滅した。

レーヌはそつと種を握ると、静かに瞑目する。けれど零れ落ちそうになる弱音を振り払つゝ即座に目を開け、踵を返して像に向かつて歩き始めた。

「プティ、帰るよ」

「うん、帰ろ。早く帰つて、種まきをしなきやね」

プティはことさら明るく応えて、レーヌの肩にとまつた。

そしてレーヌとプティと花の種は、女王の像に吸い込まれるようにして消えていった。

誰もいなくなつた女王の像と泉の上を一陣の風が吹き抜けていく。かすかに残つていた気配すらもその風に散らされ、山川草木は戻つてきた自然の静寂に浸つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4971f/>

花嫁の形代女王

2010年10月8日14時25分発行